桜島の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

南岳山頂火口では、噴火[1)]が 94 回発生し、このうち爆発[2)]は 11 回でした。噴煙は最高で火口縁上 3,000ｍまで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で南岳山頂火口から約 900ｍ（７合目）まで達しました。

昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生しませんでした。

広域の GNSS 連続観測によると、姶良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部にマグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。また、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は概ね多い状態であることから、今後も噴火活動が継続すると考えられます。

南岳山頂火口及び昭和火口から概ね２㎞の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。なお、今後の降灰状況次第では、降雨時に土石流が発生する可能性がありますので留意してください。

令和４年７月 27 日に火口周辺警報（噴火警戒レベル３、入山規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１、図３、図 5-1-①②③、図 5-2-①②③）

南岳山頂火口では、噴火が 94 回（９月：94 回）発生し、このうち爆発は 11 回（９月：なし）でした。噴煙は最高で火口縁上 3,000ｍまで上がり、弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で南岳山頂火口から約 900ｍ（７合目）まで達しました。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生しませんでした（９月：噴火、爆発なし）。また、同火口では、火映は観測されませんでした。

1）桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが火口縁上 1,000ｍ以上）の噴火の回数を計数しています。資料の噴火回数はこの回数を示します。また、基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火として噴火回数に含めていません。

2）桜島では、火道内の爆発による地震を伴い、爆発音、体に感じる空気の振動、噴石の火口外への飛散、または、気象台や島内の観測点で一定基準以上の空気の振動のいずれかを観測した場合に爆発としています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html

この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局大隅河川国道事務所、京都大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、鹿児島県及び公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

・地震や微動の発生状況（図２、図 5-2-⑥⑦⑧）

火山性地震は期間を通して少ない状態で経過しました。火山性地震の月回数は 326 回で、前月（９月：322 回）と同程度でした。桜島の南西側（深さ 10km 以浅）を震源とする火山性地震は３回でした（９月：１回）。

震源が求まった火山性地震は、南岳の深さ０～２km 付近及び、島の南西側の深さ 10km 付近、島の東側の深さ７～８km 付近に分布しました。

また、火山性微動の月合計継続時間は 24 時間 24 分で、前月（９月：９時間 54 分）より増加しました。

・降灰の状況（図４、図 5-1-⑤、図 5-2-④）

鹿児島地方気象台（東郡元）では、月合計 39g/㎡（降灰日数 18 日）の降灰[3)]を観測しました。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した桜島における火山灰の９月の総噴出量は約６万トンで、８月（約９万トン）と比較して減少しました。

・火山ガスの状況（図 5-1-④、図 5-2-⑤）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の１日あたりの放出量は 2,000～2,100 トン（９月：1,300～2,800 トン）でした。火山ガスの放出量は 2022 年７月以降、概ね多い状態で経過しています。

・地殻変動の状況（図６～８）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、一部の噴火に伴い、噴火前の山体の膨張（隆起）及び噴火後の収縮（沈降）を観測しました。２日に山体の膨張（隆起）と収縮（沈降）が観測されましたが、この変化に伴う噴火の発生はありませんでした。

GNSS連続観測では、桜島島内の一部の基線で2026年５月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸びが認められていましたが、９月頃から停滞しています。また、姶良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では長期にわたり姶良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。姶良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

3）鹿児島地方気象台（東郡元：南岳の西南西約11km）において、前日09時～当日09時の１日間に降った１㎡あたりの降灰量の月合計です。降灰量は0.5 g/㎡未満切り捨て、「０」は、0.5 g/㎡未満の降灰を観測したことを表します。



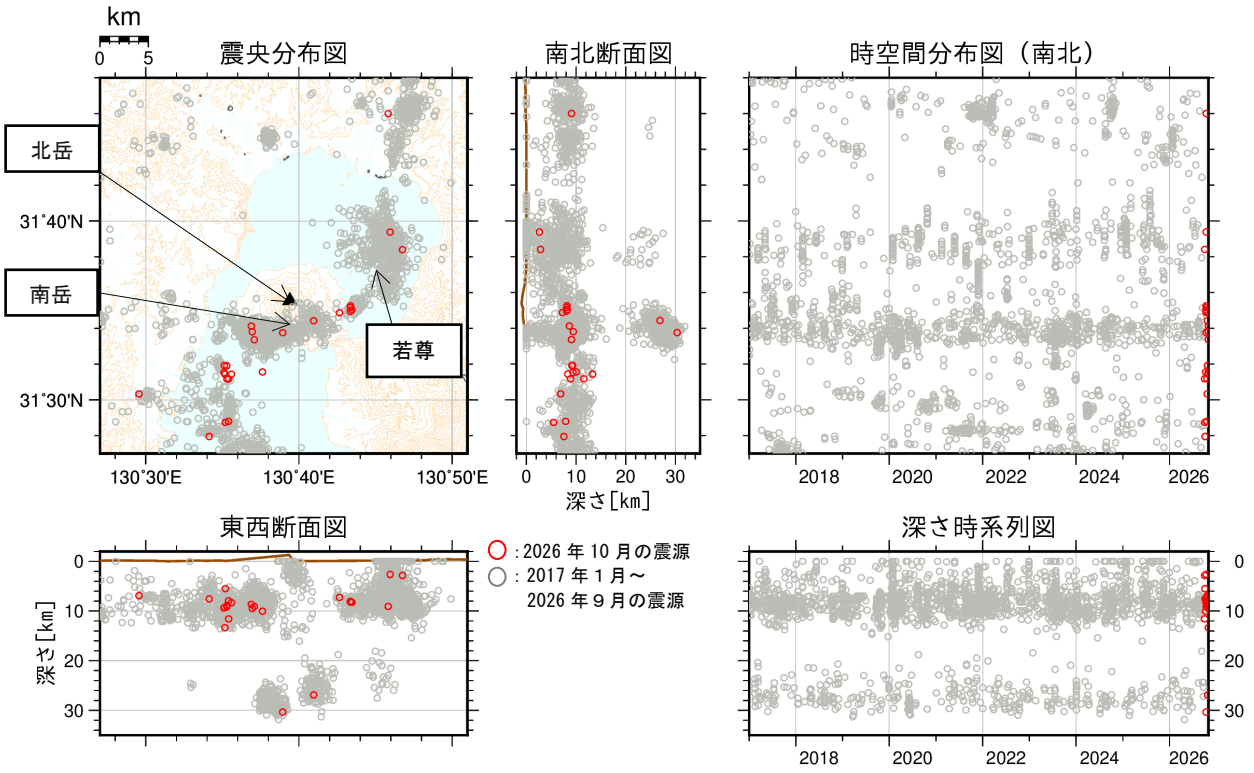
図 1-1　桜島　30 日 19 時 49 分に発生した南岳山頂火口の爆発の状況（海潟監視カメラ（大隅河川国道事務所設置））

噴煙が火口縁上 3,000ｍまで上がりました。



図 1-2　桜島　５日 01 時 23 分に発生した南岳山頂火口の爆発の状況（中央港新町監視カメラ）

弾道を描いて飛散する大きな噴石が南岳山頂火口から約 900m（７合目）まで達しました（黄破線内）。



広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020 年９月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しております。

図 2-1　桜島　姶良カルデラ周辺の震源分布図（2017 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

姶良カルデラ周辺では、地震は少ない状態で経過しました。

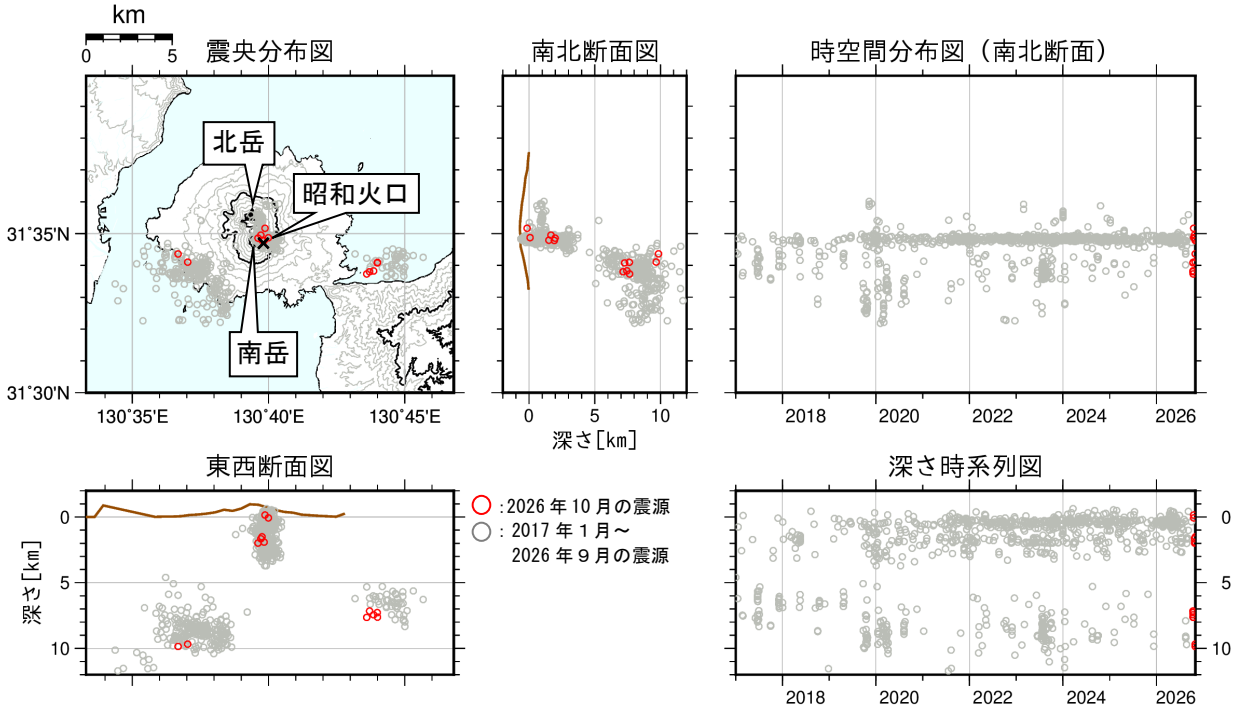


図 2-2　桜島　桜島付近の震源分布図（2017 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

震源が求まった火山性地震は、南岳の深さ０～２km 付近及び、島の南西側の深さ 10km 付近、島の東側の深さ７～８km 付近に分布しました。

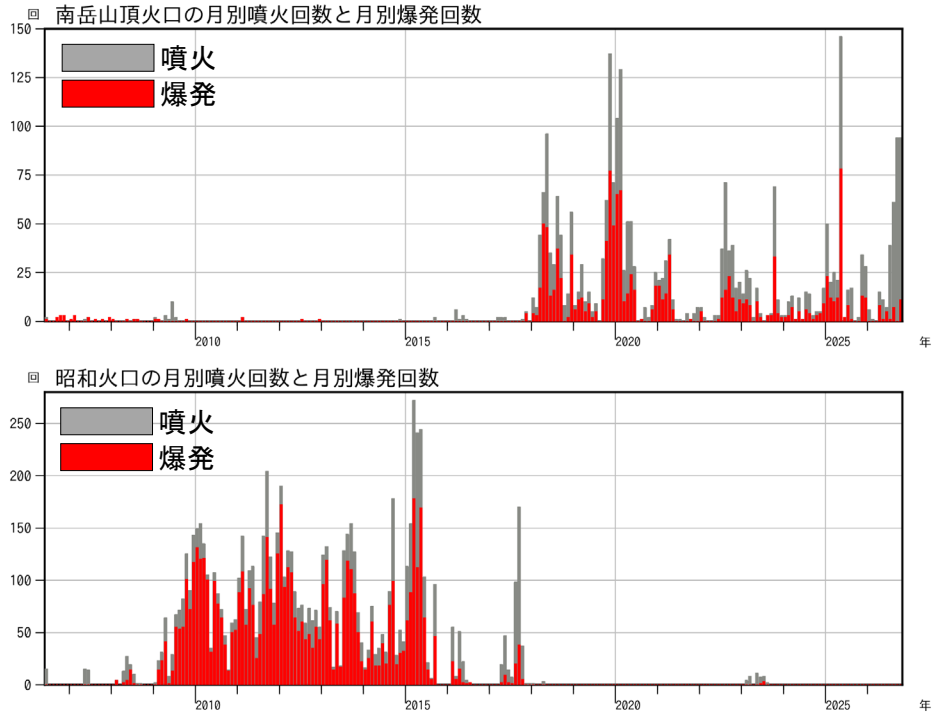


図３　桜島　南岳山頂火口（上図）と昭和火口（下図）の月別噴火回数と月別爆発回数
（2006 年６月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞
・南岳山頂火口では、噴火が 94 回（９月：94 回）発生し、このうち爆発は 11 回（９月：なし）でした。
・昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生しませんでした（９月：噴火、爆発なし）。

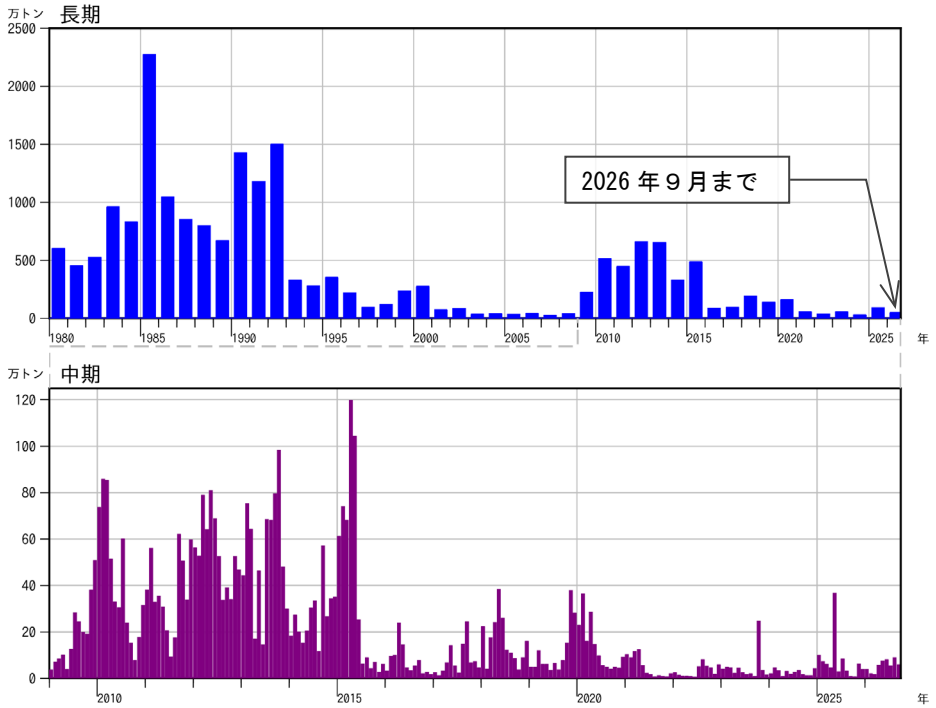


図４　桜島　鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した火山灰の総噴出量
（上段：1980 年１月～2026 年９月までの年別値、下段：2009 年１月～2026 年９月の月別値）

９月の総噴出量は約６万トンで、８月（約９万トン）と比較して減少しました。

※鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。
※降灰の観測データには、風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

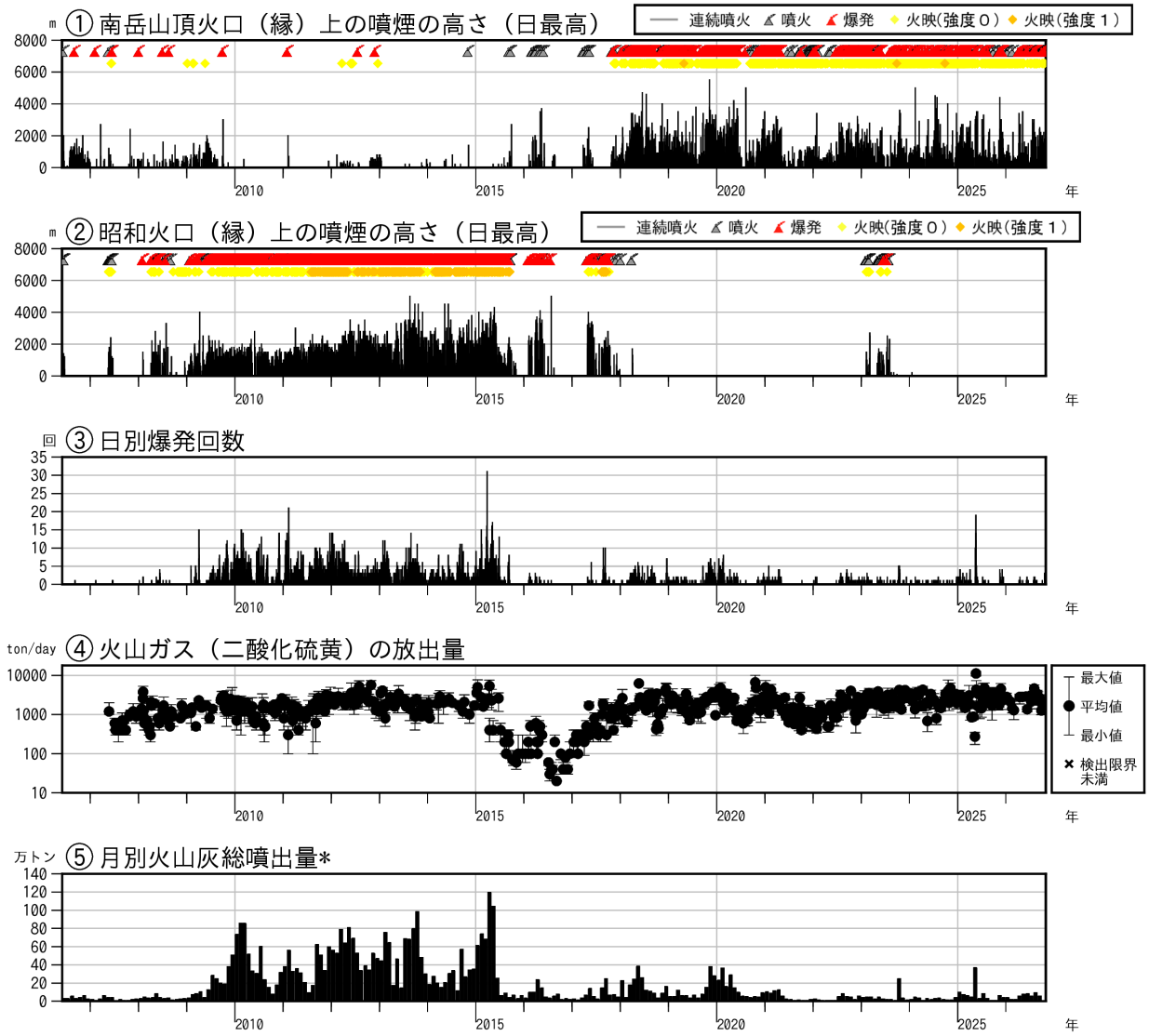
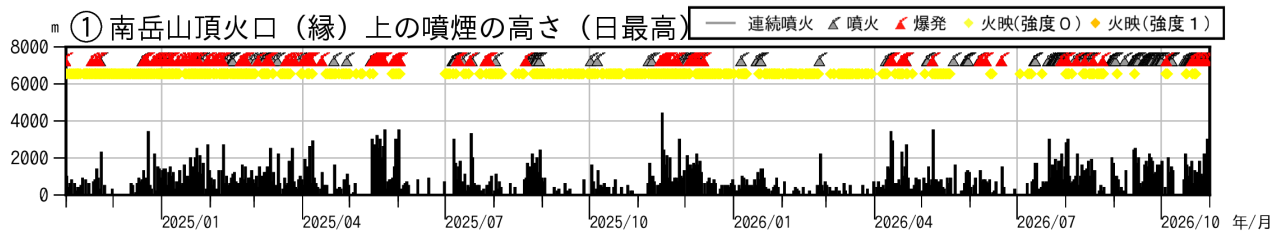


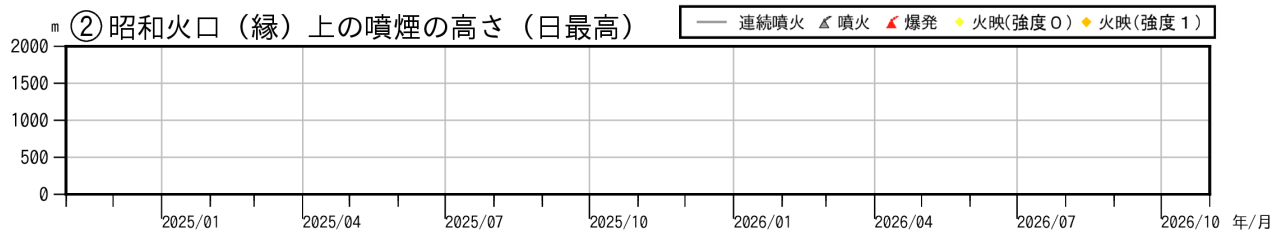
図 5-1　桜島 昭和火口噴火活動再開（2006 年６月）以降の活動経過図（2006 年６月～2026 年 10 月）

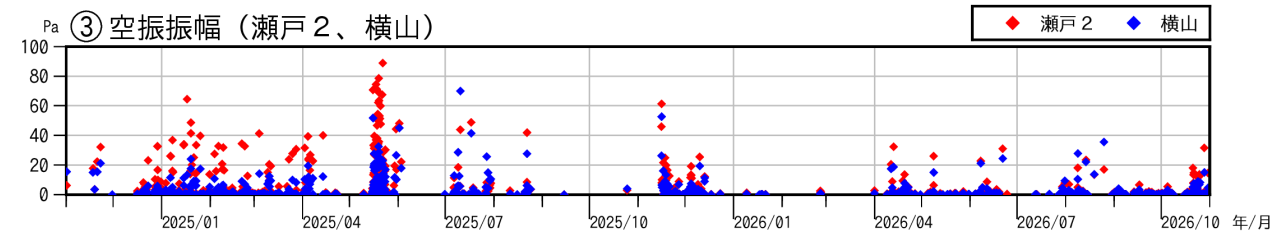
・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は 2022 年７月以降概ね多い状態で経過しています。
・2026 年９月の火山灰総噴出量は約６万トンでした（2026 年８月：約９万トン）。昭和火口での噴火活動が主であった 2009 年から 2015 年頃に比べて少ない状態で経過しています。

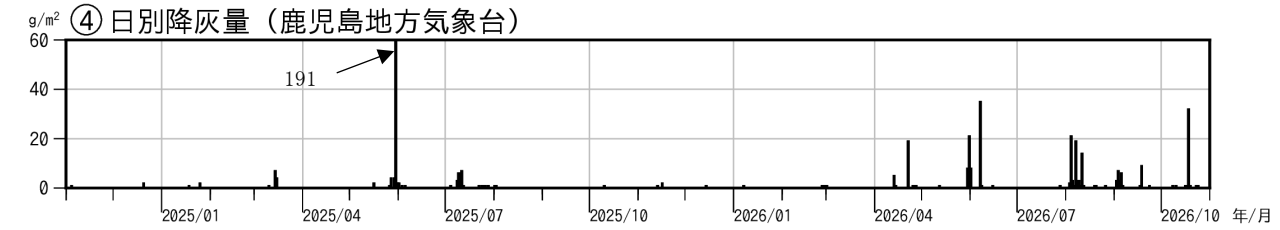
※⑤の総噴出量は 2026 年９月までの値を掲載しています。

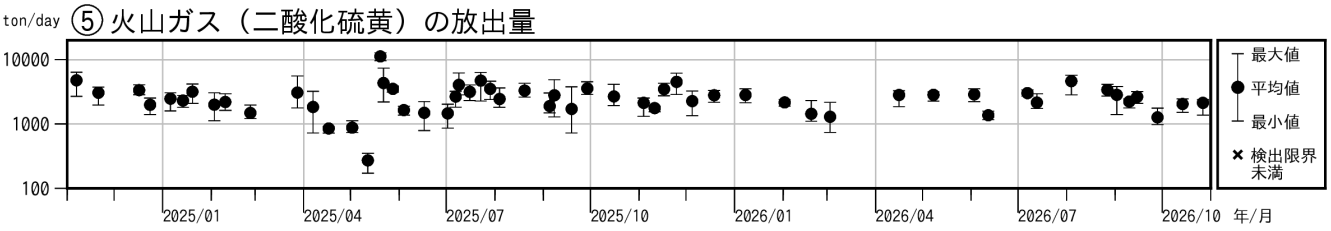
＊鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。降灰の観測データには、桜島で噴火がない場合でも風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

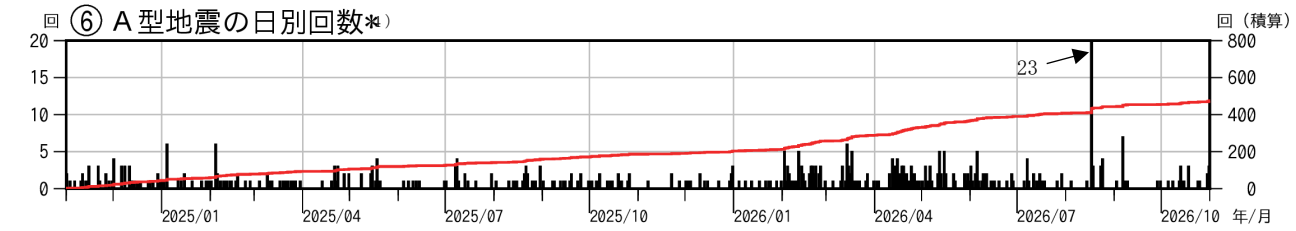

m
① 南岳山頂火口（縁）上の噴煙の高さ（日最高）
連続噴火 噴火 爆発 火映(強度０) 火映(強度１)
8000
6000
4000
2000
0
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月

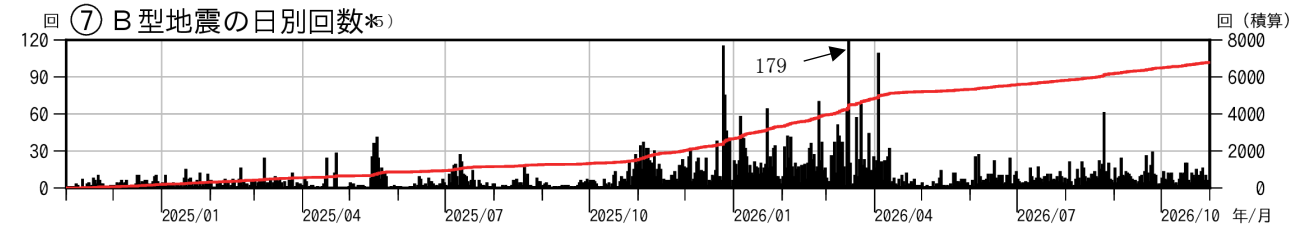

m
② 昭和火口（縁）上の噴煙の高さ（日最高）
連続噴火 噴火 爆発 火映(強度０) 火映(強度１)
2000
1500
1000
500
0
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月


Pa
③ 空振振幅（瀬戸２、横山）
瀬戸２ 横山
100
80
60
40
20
0
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月


g/m²
④ 日別降灰量（鹿児島地方気象台）
60
40
20
0
191
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月


ton/day
⑤ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量
10000
1000
100
最大値
平均値
最小値
検出限界未満
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月


回
⑥ Ａ型地震の日別回数*)
回（積算）
20
15
10
5
0
800
600
400
200
0
23
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月


回
⑦ Ｂ型地震の日別回数*5)
回（積算）
120
90
60
30
0
8000
6000
4000
2000
0
179
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月

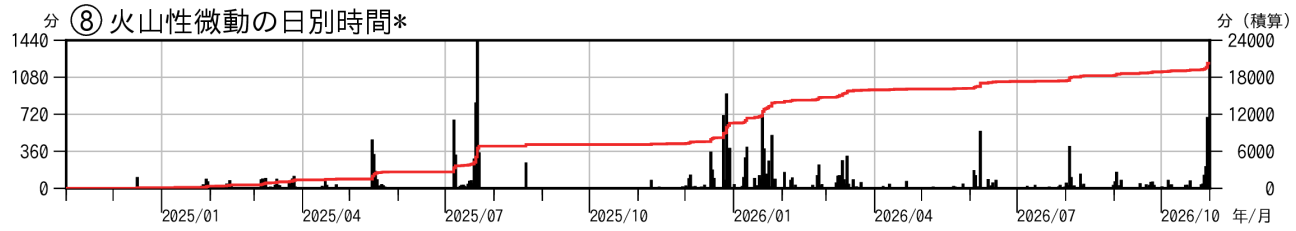

分
⑧ 火山性微動の日別時間*
分（積算）
1440
1080
720
360
0
24000
18000
12000
6000
0
2025/01 2025/04 2025/07 2025/10 2026/01 2026/04 2026/07 2026/10 年/月

図 5-2（前ページ）　桜島　最近２年間の活動経過図（2024 年 11 月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

・南岳山頂火口では、噴火が 94 回（９月：94 回）発生し、このうち爆発は 11 回（９月：なし）でした。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。
・昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生せず、火映も観測されませんでした。
・鹿児島地方気象台（東郡元）では、月合計 39g/㎡（降灰日数 18 日）の降灰を観測しました。
・期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の１日あたりの放出量は 2,000～2,100 トン（９月：1,300～2,800 トン）でした。火山ガスの放出量は 2022 年７月以降、概ね多い状態で経過しています。
・火山性地震は期間を通して少ない状態で経過しました。火山性地震の月回数は 326 回で、前月（９月：322 回）と同程度でした。桜島の南西側（深さ 10km 以浅）を震源とする火山性地震は３回でした（９月：１回）。
・火山性微動の月合計継続時間は 24 時間 24 分で、前月（９月：９時間 54 分）より増加しました。

※①②では白色及び色不明の噴煙の高さは除いています。
※①②で高感度の監視カメラでようやく認められる程度の火映（強度０）を黄色で、現地調査等において肉眼でようやく認められる程度の火映（強度１）を橙色で示しています。
※赤線は火山性地震の回数や火山性微動の時間の積算（右軸）を示します。

＊「あみだ川及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動 2.5μm/s 以上　横山：水平動 1.0μm/s 以上）あみだ川観測点地震計の機器障害により、あみだ川観測点の他成分（上下動 2.3μm/s 以上）、赤生原観測点（水平動 0.5μm 以上）で計数している期間があります。

４）火山性地震のうち、Ａ型地震はＰ波やＳ波の相が明瞭で比較的周期の短い地震で、一般的に起こる地震と同様、応力集中による地殻の破壊によって発生していると考えられますが、火山活動に直接関係する発生原因として、マグマの貫入に伴う火道周辺の岩石破壊などの例があります。
５）火山性地震のうち、Ｂ型地震は相が不明瞭で比較的周期が長い地震で、火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

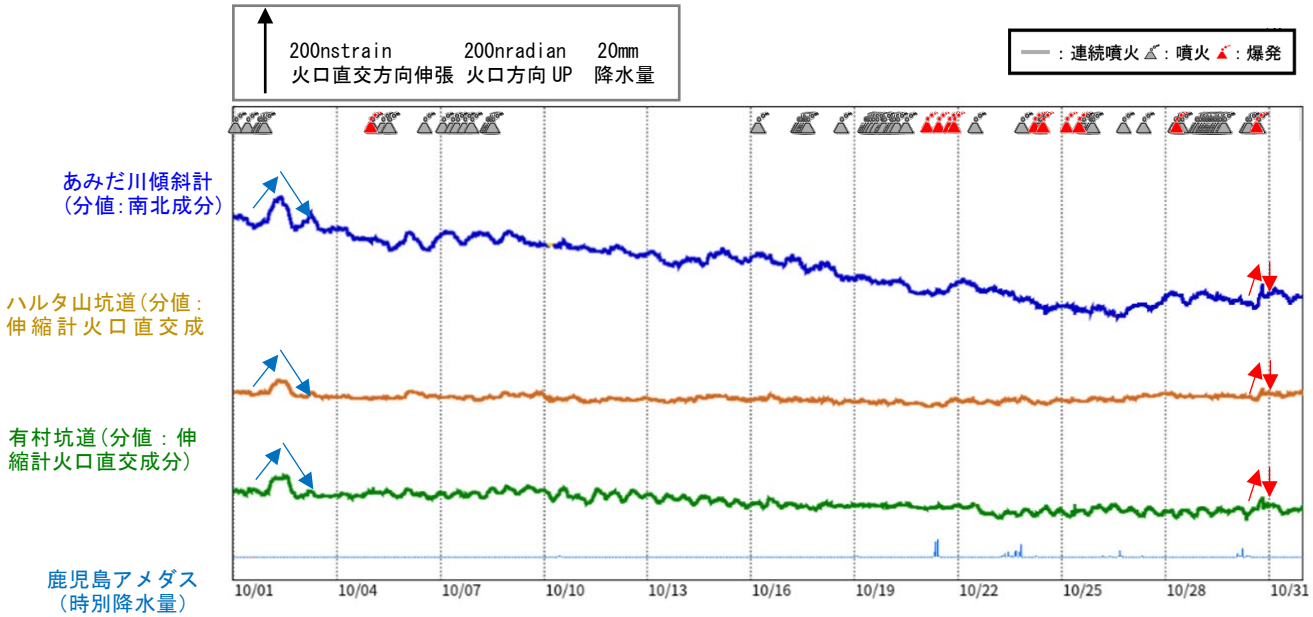


図６　桜島　傾斜計及び伸縮計による地殻変動の状況（2026 年 10 月１日～10 月 31 日）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、一部の噴火に伴い、噴火前の山体の膨張（隆起）及び噴火後の収縮（沈降）を観測しました（赤矢印）。２日に山体の膨張（隆起）と収縮（沈降）（青矢印）が観測されましたが、この変化に伴う噴火の発生はありませんでした。

※各観測点のデータには、潮汐補正を行っています。
※図の作成には、大隅河川国道事務所の有村坑道及び京都大学のハルタ山坑道の観測データを使用しています。
※地殻データには、まとまった降水による影響が含まれる場合があります。
※あみだ川観測点は山頂火口域のほぼ北に位置していることから、傾斜計南北成分の南側が上がる傾斜変動を火口側が上がる変動とみなして表示しています。

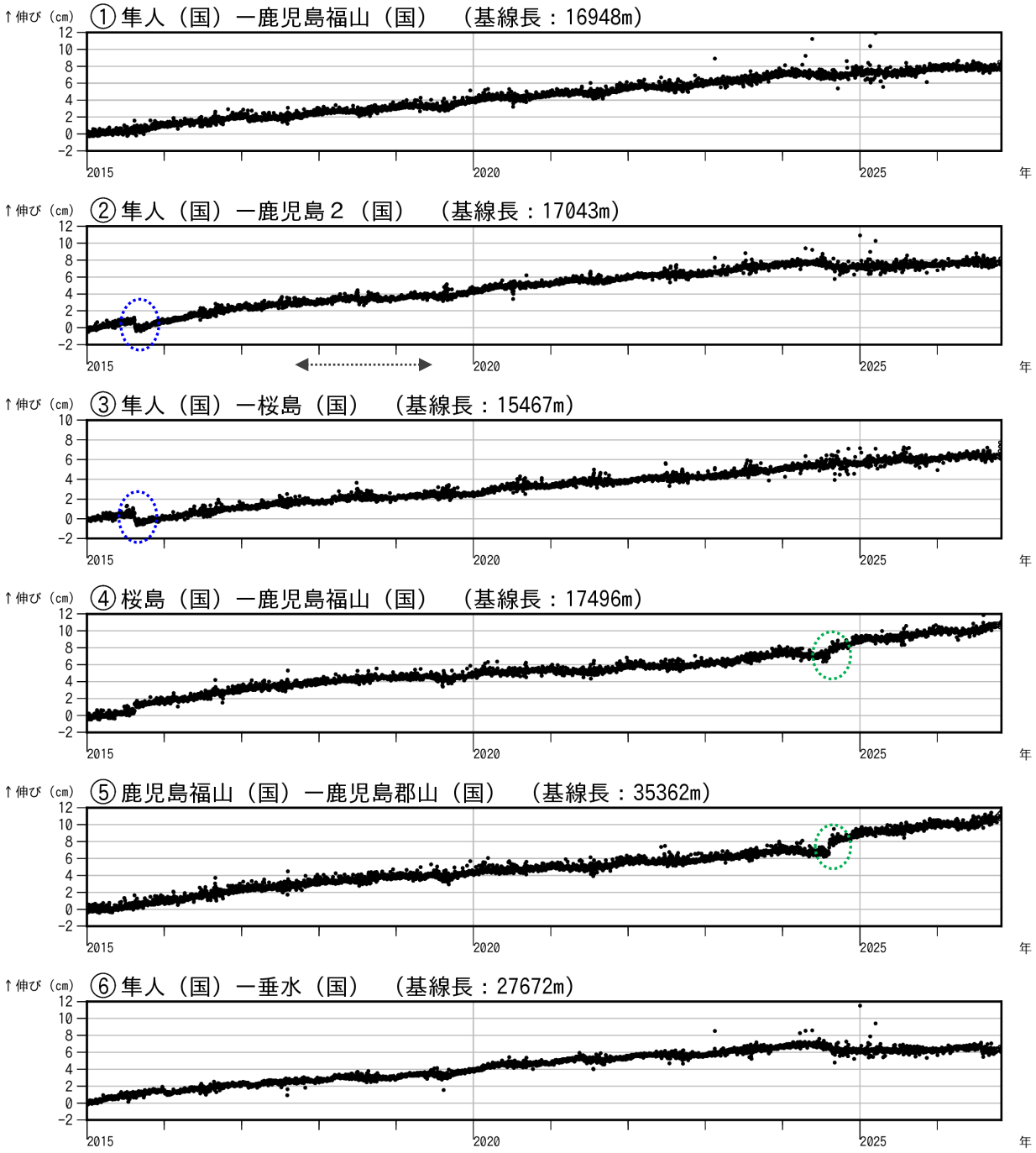


図 7-1　桜島　GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年１月～2026 年 10 月）

姶良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、長期にわたり姶良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。姶良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

これらの基線は図８の①～⑥に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
基線②は霧島山の深い場所での膨張によるとみられる変動の影響を受けている可能性があります（黒破線矢印期間内）。
基線④⑤の緑色の破線内は 2024 年８月８日の日向灘の地震による変動です。
青色の破線円内は 2015 年８月の急激な山体膨張による変動です。
（国）：国土地理院

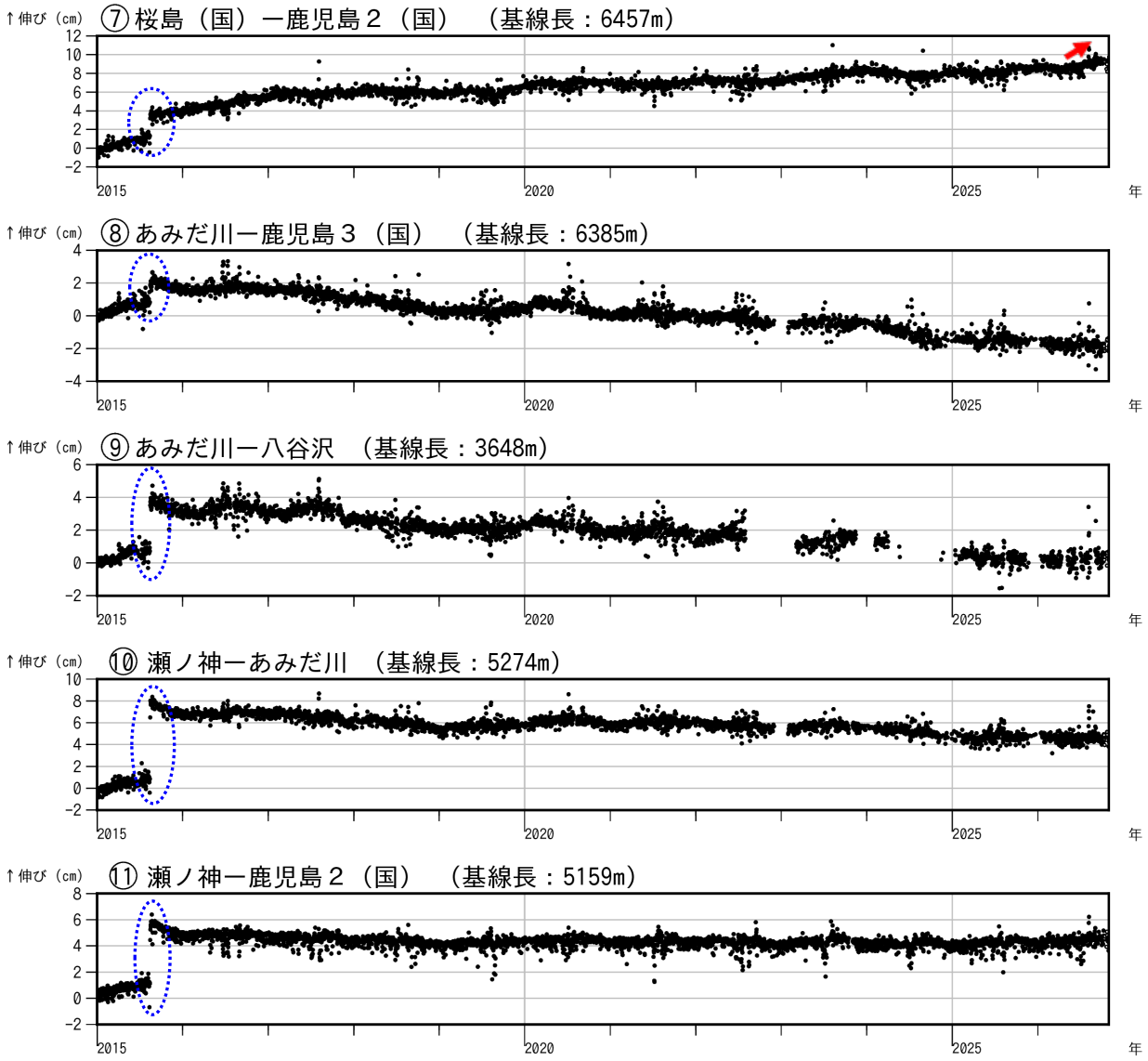


図 7-2　桜島　GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年１月～2026 年 10 月）

GNSS 連続観測では、桜島島内の一部の基線で 2026 年５月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸び（赤矢印）が認められていましたが、９月頃から停滞しています。

これらの基線は図８の⑦～⑪に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
青色の破線円内は 2015 年８月の急激な山体膨張による変動です。
（国）：国土地理院

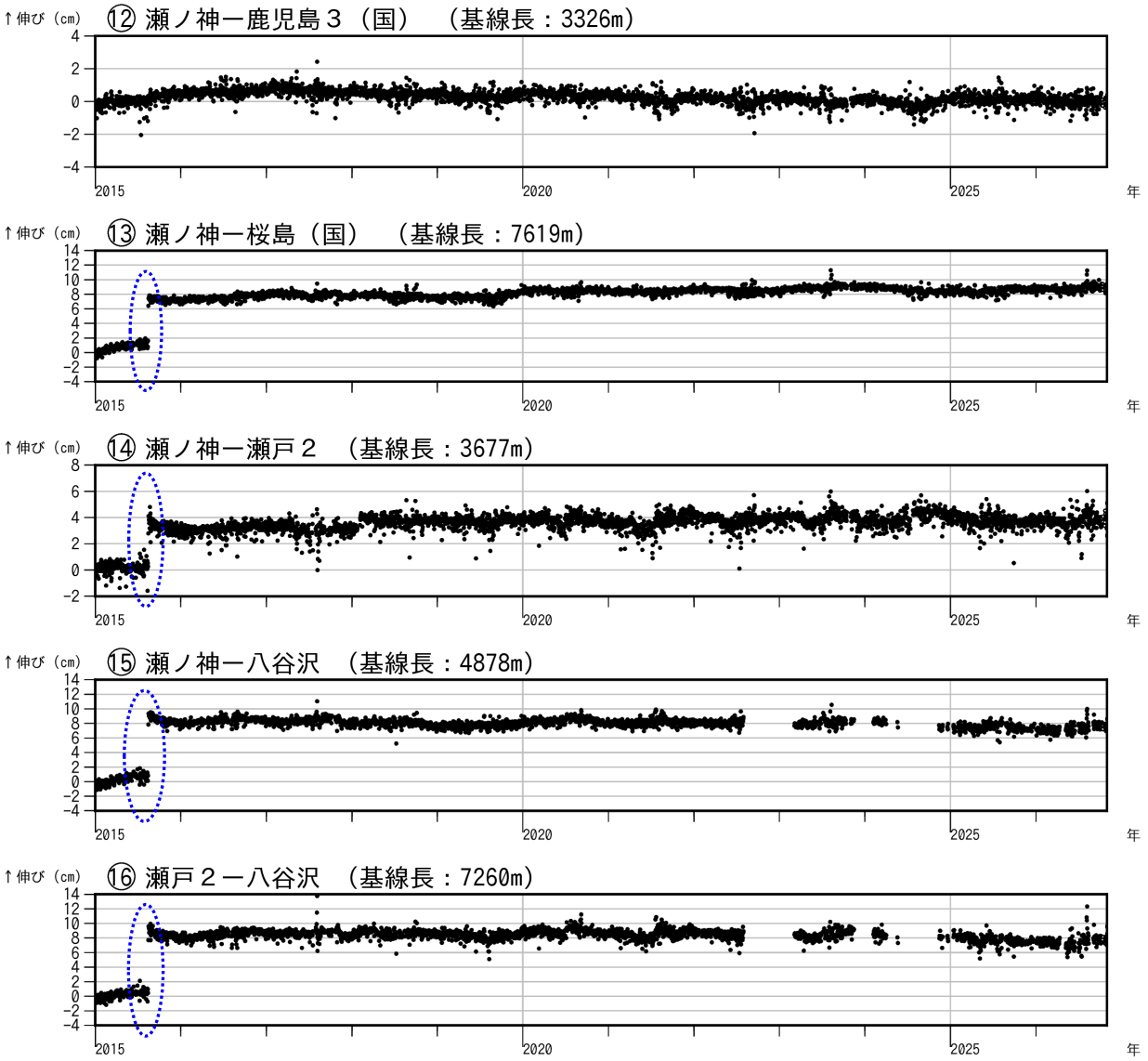


図 7-3　桜島　GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年１月～2026 年 10 月）

GNSS 連続観測では、桜島島内の一部の基線で 2026 年５月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸び（図 7-2 赤矢印）が認められていましたが、９月頃から停滞しています。

これらの基線は図８の⑫～⑯に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
青色の破線円内は 2015 年８月の急激な山体膨張による変動です。
（国）：国土地理院

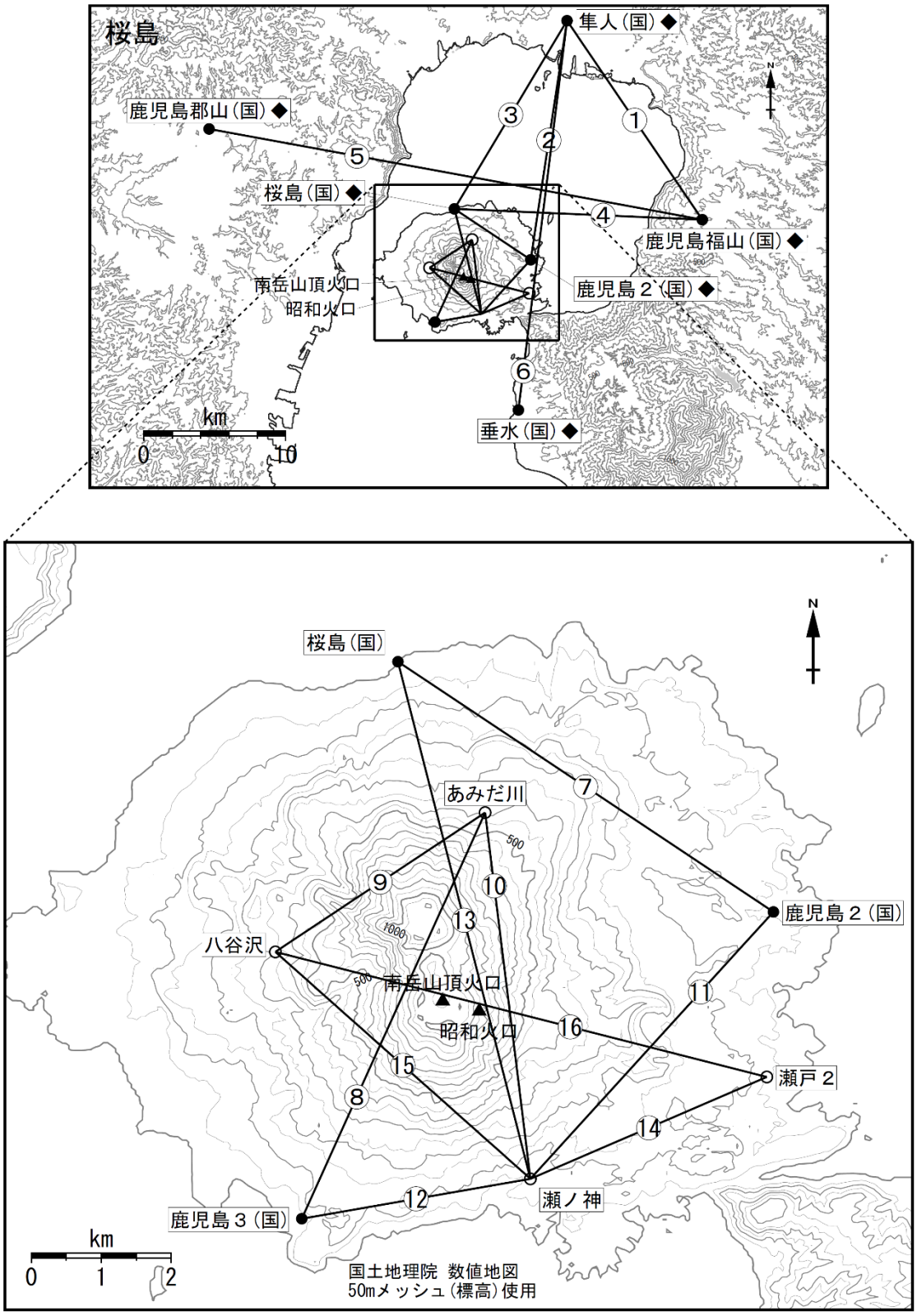
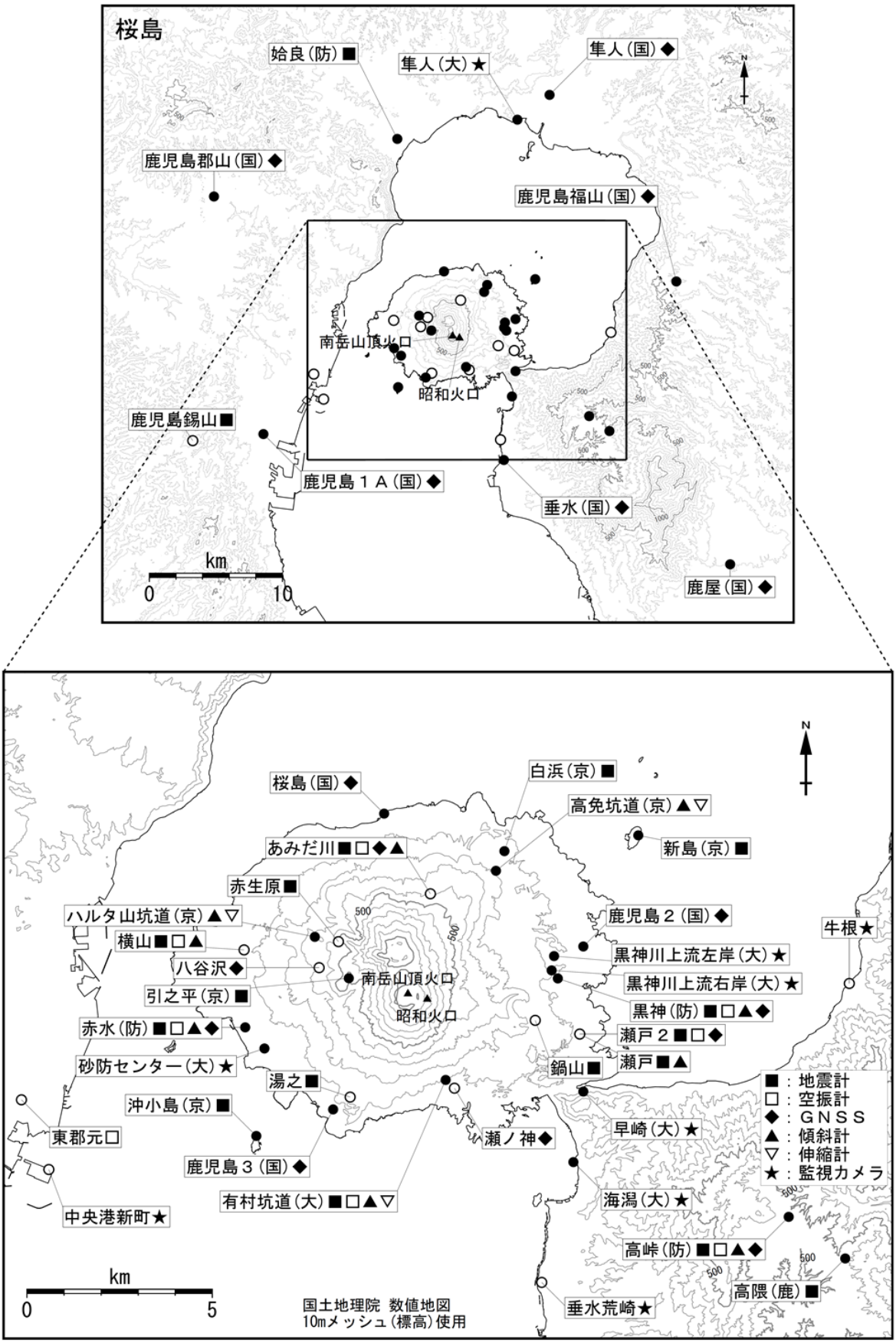


図８　桜島　GNSS 連続観測点と基線番号

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（大）：大隅河川国道事務所、（京）：京都大学、（鹿）：鹿児島大学、（防）：防災科学技術研究所

図９　桜島　観測点配置図